佐佐木由幾二十首選

斎藤佐知子・選

額髪風にみだして子はかける道にしらじら散りしくさくら　昭和16・8「鶯」
視力なき瞳をまつ直に我にむけ意識なく語るは死にてならぬ人　昭和35・2「心の花」
もろ手にて御柩ゆする安らかに死を眠る父のおん眼ひらけと　昭和39・4「心の花」
一千四百三十メートルの頂きに有る湖の青おもひて眠る　『平窓の淡月』
朝雲は輝けるなり食卓に幼な児は新しきことば一つ言ふ
わが家まで駅より坂の無きことに夜更け拘り坂を踏みたし
青嵐のただなかにゐて豊かなり吾に子のあり子に妻のある
しなやかに野を跳ぶ豹も見ず終るわれの一生か多摩川の辺に
冷ゆる畳に座り続けて本読みゐし人ありしかな遠き日のこと
細き蛇に生きよ生きよと言ひきかす生きて年々このみどり見よ
輝くと言へど宇宙に浮かびゐて太陽も時にさびしくあらむ　『一茎の草』
少年の魯迅が口を漱ぎけむ小さき石の井わづか水あり
夕かげを総身にまとひほつそりと黄金の鶴となりて歩めり
一茎に一華掲げてひまはりの丈高し梅雨もすぎてゆくらし
夕かげの中なる緋桃咲き疲れもの憂げに見ゆ「脳死」は「死」なりと
常に用ふる古きこの辞書手に重し　父の　わが背の　指紋の重さ　平成9・1「心の花」
「独立自尊」折に口すさみたよたよとならむ心をひき絞るなり　平成12・1「心の花」
戦へる国の幼なに涙ぐみその眼もて紅枝垂咲けば見にゆく　平成15・6「心の花」
ばら咲けばばらの歌よみとめどなくつながりてゆく夢の如きもの　平成19・6「心の花」
独りゐてその静寂に帰りをり明けきらぬ空の仄ひかりのなか　平成21・3「心の花」

昭和１４年１０月